

英語を勉強せずにグローバル人材になる方法？

服部 記子（サノフィ株式会社 シニアマーケティングマネージャー）※

2005年の夏、「語学留学してきます」と言い残し、私は研究室を飛び出した。人を助けたいという高尚な、だけれどもあいまいな理由で研究者をめざしていた当時の私は、大学院に進学したばかりだということに、研究という仕事が自分に合っているのかわからずにいる。思い立つと実行せざるを得ない性分の私はいても立ってもいられず、理学系研究科における典型的なキャリアである研究者とは違う道を模索しに、とくに行く当てもないままスーツケースひとつでパリに飛び立ったのだ。

フランスを留学先に選んだのは半ば思い付きだ。理学部学生選抜国際派遣プログラムの前身である理学部海外渡航制度で初めて訪れたヨーロッパで「外国は食べ物がまずい」という概念を覆された上、ヨーロッパの学生生活の楽しさを垣間見るようになった。その後知人を頼ってパリに語学留学したのだが、やはりもう少し長く滞在したくなり、薦められたHECパリ経営大学院（HEC Paris）に出願してみたのである。（ちなみに理学部海外渡航制度に参加した友人たちのほとんどは国際的に活躍する研究者になり、現在海外暮らしをしているものも多い。彼らにとってもあの2週間はいい刺激になったのであろう。）

それから8年、計3カ国、2つの大学に2つの会社、6つの都市、8つのアパートを経て去年の夏、仕事の都合でパリに戻ってきた。「研究とビジネスをつなぐ」という居場所を見つけ、現在はフランスの製薬会社で仕事をしている。こう書くとなんだか大げさに聞こえるが、ヨーロッパでは国境を越えて遠距離通勤している人なんてざらにいるし、キャリアのためには留学も外国勤務も必須条件だ。ヨーロッパではみな学生のうちに数ヶ月から一年にもわたる長期のインターンシップをするのだが、それを外国とする人も多い。文系の学生は多国籍企業や銀行で、理系の学生は製薬会社や製造業の研究開発部門で、といった具合である。そのせいか、数ヶ国語を流暢に話せるのも大学院時代の友達の中では「普通」のことであった。

とはいえ、こちらでいう流暢という概念は日本人が思っているそれとは少し異なっているように思う。私も昔は、発音がきれいで、ミスなく書いたり話したりできることが大事なのだ



様々な国籍の人が数万単位で集う国際学会の様子

思っていた。しかし、東大理学部時代に外国人がいる研究室に在籍していたこと、また、いろいろな国の人が混ざり合って住むヨーロッパにきたことによってその概念は覆された。それ以来数々の職場をみてきたが、ヨーロッパでもアメリカでも、世界各国から来た人が英語を共通言語として働いているのが普通である。はじめは、「こんな海外経験の浅い、語学も完璧でない外人にどんな仕事を任せてくれるのか」と不安に思っていたものだが、そんなのは全くの杞憂であった。むしろ、日本人であることが有利に働くことがとても多い。

全体で見ると、英語をネイティブで話す人はむしろ少数派で、数ヶ国語を完璧に話す人など特殊な環境で育った人を除いてはほぼいないのが実情だ。極端に言えば、記者やコピーライターでない限り、訛っていても、文法が間違っても、分かりやすいメールを書けて会議や学会で論理的なプレゼンを堂々とできる人が勝ちである。難解な英語が分かるよりインド人、フランス人、スペイン人の訛りを的確に理解できるほうがよほど助けになるし、完璧な英語にこだわるよりも違う外国語を学んだり、他分野の知識を身につけるほうが仕事上でも強みになる。

東大においても「国際的に活躍できるグローバル人材育成」というのが大きな課題になっていることであろう。そこで、学生の皆さんにはぜひ日本を飛び出してみてもらいたいと思う。学校や企業から派遣された短期滞在という枠を超え、自分の力で現地の人と同じ土俵に立ち、勉強やインターンシップをし、さらには現地で就職をして、東大の授業や研究で得た知識や技術を武器に真のグローバル人材になってほしい。

※ 2005年 東京大学理学部生物学科卒業

理学部への期待

改めて述べるまでもなく、理学部の本来の使命は、人類知の追及や、目先の利益にとらわれることなく、100年あるいはそれ以上先の科学技術の基となる基礎学問を行うことである。昨今、「出口を見据えた基礎研究」などというのを目にするたびに苦々しく思っておられる方が、理学部に在籍される研究者、学生の殆どであろうと推察する。筆者も元は理学部出身であり、このような精神を学生時代に十分に鍛え込まれてきた。

いっぽうで、1999年に世界科学者会議が「科学は人類全体に奉仕すべきものであると同時に、個々人に対して自然や社会へのより深い理解や生活の質の向上をもたらし・・・」とのいわゆる「ブタペスト宣言」を出していることをご存じであろうか。21世紀の科学者の役割に関し、従来の視点からの大きな転換の必要性を謳っているのである。

またわが国においては1995年の科学技術基本法制定以降、政府は科学技術関係予算を大幅に増額してきた。たとえばここ20年間で、科学研究費は約2.5倍、科学技術振興費も2倍強となっている。これは主として科学技術の社会、経済への貢献を期待してのものであることを、理学部に在籍の研究者とて直視する必要がある。

「社会的要請はわかった。しかし、自分のやっている研究は応用とは全く関係ないので、貢献のしようが無い…」、そう思われる研

橋本 和仁（工学系研究科応用化学専攻 教授）*

究者も理学部には数多くいることだろう。そこで提案したい。自分の研究テーマを変更することは全く必要ない。しかし、これまでのテーマに加え、新たに社会的貢献を意識した研究課題を付け加えてみてはいかがであろうか。新たなテーマにかけるエフォート割合は、研究者によって当然異なってよい。しかし、重要なのは、他人に任せるのではなく、全員がそのような研究をそれぞれに開始することである。たとえ個々の貢献は小さくとも、理学部所属の研究者全員が、こぞってそのような意識をもち、研究を行えば、全体としてのベクトルはきわめて大きなものになるのではなかろうか。



橋本和仁教授

理系少年の多くが理学部にあこがれ、その中でもとくに優秀な人が大学、大学院へ進み、研究者として活躍しているに違いない。理学部は理系頭脳の宝庫である。ぜひともこの優れた能力を、社会のため国家のためにも使ってもらいたいと切に願うのである。

*総合科学技術会議議員、産業競争力会議議員。1980年東京大学理学系研究科化学専攻修士課程修了

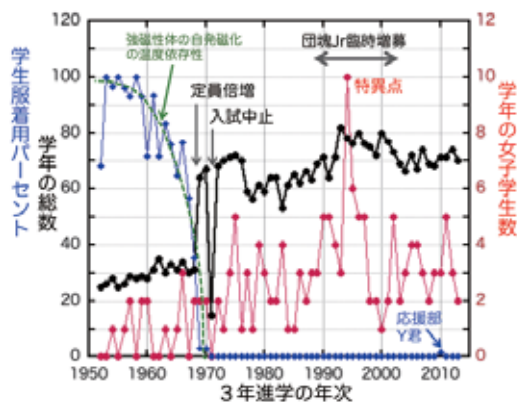
物理学科「3年進学写真」が語る半世紀

牧島 一夫（物理学専攻 教授）

物理学科では毎年4月に3年生の集合写真を撮り、学生と教職員に配っている。これら「3年進学写真」は以前、数冊のアルバムに貼られ、4号館にあった教務室で、威厳ある主任秘書様の背後の戸棚に収められていた。偶然アルバムの存在を知っていた私は1997年の暮れ、建替え移転の際に大切に運び、新1号館の教務室で開梱していた。通りかかった同僚のH教授が、それを見て「おお、これはすごい」。数日後、すべてスキャンされて物理ホームページにアップされていた。現在は残念ながら

肖像権保護のため、サイト内でのみ閲覧できる。

これらの写真は歴史の証人である。「あの大先生の若い頃」を見るだけでも楽しく、撮影場所である旧1号館の玄関の変遷もわかる。今回それらを解析し、何でもグラフにする癖を發揮して図をつくってみた。色々な情報が読み取れる中でとくに目立つのは、高度経済成長と団塊世代の入学に伴う定員倍増があった頃、学生服（青）がストンと消えたことである。横軸を温度に見立て、二次相転移の秩序曲線（緑）を重ねると、良く一致する。服装も協同現象（当時の表現では共同幻想）なのかもしれない。女子学生数（赤）には一時ピークがあったが、長期的には増加せず、ついにこの4月から四十数年ぶりにゼロとなるそうで、悲しい。



図：物理「3年進学写真」の解析結果。全学生数（黒；左目盛り）、女子学生数（赤；右目盛り）、および学生着用者の全学生に対するパーセント（青；左）を示す。緑の点線は、横軸を温度（1945年が0、1970年がキュリー点）と見た時の鉄の自発磁化曲線。

撮影は1998年度から新1号館で続けられ、2001年度からカラーになったが、2010年頃から、ピースサインや「変顔」をする学生が現れた。将来、息子や娘が入学してそれを見たら、「やっぱりうちの父ちゃんは、若い頃からこんな風だったんだな」と納得するに違いない。

温故知新

— 第4回 —